



人機共想——人と AI が、互いに想いをめぐらせる創造の時代へ

■ 石井 力重



3万人のビジネスパーソンとアイデアワークを重ねてきた創造性の研究者として、世にある創造技法を AI に実行させる実験を長年続けてきた。日本で使われている創造技法は数え方にもよるが 300 ほどある。それらを AI に実行させてみたところ、私の実践的な評価では約 7 割が実行可能だった。書籍『AI を使って考えるための全技術』は、その成果を形式知にまとめたものだ。

この数字は最初、驚きだった。ブレインストーミングの変形技法も、強制連想法も、バイオミクリーを援用したアプローチも、AI は手際よくこなした。ならば私たち——創造技法を使って仕事をする人間——の役割はどこへ向かうのか。そして創造性の研究者として、次に取り組むべき問いは何か。

しかし 3 割は、できなかった。当初は失敗と受け取ったが、この 3 割がこの時代を進んでいくための示唆だと後に気づいた。できなかった事例を長期にわたって観察・分類した結果、4 つの領域に収まった。Sensitivity (感受性と脆さ)、Empathy (身体や経験を通じた情動的共感)、Notion (まだ言葉にならない考え～直感～直観)、Dedication (ある一事に何年も没頭し、専門家でも知らない 1mm を開くような一途さ)。頭文字をとって「SEND」と呼んでいる。これが、創造の領域で AI には届きにくい「人間性の高い仕事」の輪郭だ。

特に Dedication は、AI の本質的な限界を映し出す。AI は、テキストとして記述された知識は扱えても、身体や経験を通じてしか得られない暗黙知には届かない。しかし人間は、誰も踏み込んでいない領域に潜り

■ 石井 力重
アイデアプラント 代表／早稲田大学 非常勤
講師

創造工学研究者。3万人超のアイデア創出を支援。著書に『AIを使って考えるための全技術』（11万部）。ブレインストーミングを遊びながら学べる発想支援カード『プレスター』をプロデュース。



込み、暗黙知を掘り起こしてフロンティアを少しずつ押し広げる。その積み重ねがやがて AI の学習素材となる。没頭する人間は、知識の最初の主要な産地なのだ。

もう1つ、見えてきた非対称がある。AI は既存のアイデアを分析し、「誰もまだ考えていない空白領域」を的確に見い出す。そこまでは得意だ。しかしその空白を目の前にしたとき、AI と人間の反応は鮮明に違う。AI はその空白を1つの処理対象として扱い、効率良く「それらしい」アイデアを返す。人間は広大な原野を前にした探検家の目になり、一気に創造性が爆発する。この非対称が、人間の役割を指し示している。

創造性とは「よく知らないことを考える技術」とほぼ等価だと、以前から言い続けてきた。AI はその「知らないことを感じる」手前で立ち止まる。SEND はまさにその先にある。

だからといって AI は創造の敵ではない。「AI に考えさせる」ではなく「AI と共に考える」——この違いに、可能性の全部がある。たとえば AI が出した一手を受け取り、そこから人間が連想を飛ばし、AI が展開し、人間が感性で接ぎ木する。その往復を私は「人機共想」（じんききょうそう）と呼んでいる。人と機械（AI）が、互いに想いをめぐらせるという意味だ。

仕事はより深く、より感性的なものへと移っていく。感受性、共感、直観、没頭——SEND が体現するものが、豊かに発揮される時代に入るだろう。